

大学入学時と1年後の満足度

－学科選択満足度の変化と関連要因についての探索的検討－

小塩 真司・佐藤 枝里・願興寺 礼子・桐山 雅子

1 問題と目的

これまでに、筆者らの研究グループは、新入生を対象としたアンケートの中から大学および学科選択への満足度をとり上げ、継続的に成果を発表してきた。ここでの満足度とは、「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問に対し、「満足である」から「不満である」までの5段階で回答された内容のことを指す。

たとえば、小塩・願興寺・桐山（2006）では、学部別の満足度の得点を検討し、経営情報学部新入生の満足度がやや低いことを示した。小塩・願興寺・桐山（2008a）では、人文学部全体および学科ごとに、2007年度新入生までのデータを用いて、学科選択理由が満足度に及ぼす影響を検討した。小塩・願興寺・桐山（2008b）では、分析対象を1998年度から2008年度において全学部・学科へ入学した新入生に広げ、分析を行った。

山田（2009）は、全国の国公立私立大学生を対象とした調査から、およそ8割の大学生が自分の所属大学に対して満足感を抱いていること、設備面での満足感が高い学生が多い反面、教育システムや進路支援などソフト面での満足感が高い学生は少ない傾向にあることを明らかにした。このように、大学においてどの程度満足であると感じるかは、領域によって異なるようである。

本学においては、どのような要因が満足度に影響を与えているのだろうか。小塩・吉住・佐藤・願興寺・桐山（2010）では、1998年度から2010年度の全学部・学科への新入生を調査対象として、入学年度による満足度の変化と、満足度に影響を及ぼす要因を検討した。そして、第1に、満足度は入学年度によって徐々に変化することが明らかにされた。これは、学部・学科によって変化の方向性が異なっており、単に一定方向への変化をするだけでなく、何らかの理由により上下に変動する可能性が示唆されたことを意味する。第2に、新設された学科は比較的高い満足度をもつ新入生が多いことが示された。ただし、すべての学部・学科についてそう言えるわけではなく、学科の特徴やその学科の学問上の特徴、教員の意識や教育上の工夫、学生との接し方等、様々な要素がかかわることが推測された。

そして第3に、満足度に影響を及ぼす要因のひとつとして、自律的な大学・学科選択を行うことが示唆された。大学受験に際し、不本意な入学や友人の影響など他律的な大学選択よりも、自ら決めることが満足度の向上に影響を及ぼすようであった。このことから、受験生が自らの選択で大学選択を行うための進路指導につながる施策を行うことが、入学後の新入生の満足度の高さにつながると示唆された。

これまで、大学および学科選択満足度については、入学時のアンケートを分析対象としてきた。では、入学後の満足度はどのように変化していくのであろうか。

鈴木・藤生（1999）は、大学入学直後の4月と、入学6か月後の10月において、同一の対象者に調査を行っている。そして、大学入学時において友人との良好な経験をもち、大学に期待をもつ学生は、10月時点でより大学生活に満足していることなどを示している。また、4月の友人数は満足度に関連していないが、10月の友人数は満足度と正の関連を示した。このことは、大学に対する満足度と入学後の学生生活のあり方との間に相互のかかわりが生じる可能性を示唆する。

本研究は、2009年度に中部大学に入学した学生について、入学直後の大学・学科選択満足度と1年後の満足度を比較することを試みる。さらに、満足度に関連する要因として、第1に悩みの内容、第2に相談相手の種類、第3に大学生活の充実度を取り上げる。

見館・永井・北澤・上野（2008）は、大学生の学習意欲や満足度を規定する要因として、教員や友人とのコミュニケーションを取り上げて検討している。見館ら（2008）における質問項目を見ると、その研究で取り上げられている教員や友人とのコミュニケーションとは、質問や相談ができる相手としての教員や友人のことである。本研究では、教員や友人以外にも、父母など親族や、事務職員、学生相談室との相談関係にも広げて検討する。

また、相談という行為を行う前段階として、具体的な個別の悩みがある。小塩・桐山・願興寺（2006）は、大学新入生の悩みの内容が入学年度によって変化してきていることを示しているが、個別の悩みの内容と全体的な満足度との関連は検討されていない。

表1 分析対象者

	男性		女性		不明		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
応用生物学部	192	11.94	76	4.73	0.00	0.00	268	16.67
経営情報学部	106	6.59	25	1.55	1.00	0.06	132	8.21
現代教育学部	84	5.22	74	4.60	0.00	0.00	158	9.83
工学部	570	35.45	16	1.00	0.00	0.00	586	36.44
国際関係学部	18	1.12	11	0.68	0.00	0.00	29	1.80
人文学部	120	7.46	105	6.53	0.00	0.00	225	13.99
生命健康科学部	51	3.17	159	9.89	0.00	0.00	210	13.06
合計	1141	70.96	466	28.98	1.00	0.06	1608	100.00

さらに本研究では、大学生生活の肯定的な側面にも注目したい。そこで、充実した大学生生活に関する質問項目を用意し、満足度との関連を検討する。

以上のように、本研究では、2009年度新入生を対象として、入学直後と1年後の縦断的調査を行う。入学直後におけるアンケートからは、大学・学科選択満足度のデータを抽出する。そして、1年後の4月においても、同様に大学・学科選択満足度、悩みの内容、相談相手、大学生生活充実度を測定する。これらの関連要因と、入学直後および1年後の満足度との関連を探索的に検討する。

2 方法

2.1 調査手続き

第1回の調査は、2009年に新入生として入学してきた学生を対象として行われた。新入生を対象とした研修において、回答が行われた。第2回の調査は、2010年4月に行われた在学学生を対象とした健康診断を受診した学生を対象に行われた。

2.2 調査内容

第1回調査における大学・学科選択満足度については、中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問に対し、「満足である」から「不満である」までに「その他」を加えた6つの選択肢から1つを選ぶ形式で測定されている。ここでは「不満である」を1点、「どちらでもない」と「その他」を3点、「満足である」を5点とする、5点満点に換算して用いた。このデータは、小塩・吉住・佐藤・願興寺・桐山（2010）の分析対象の一部と同一のものである。

第2回調査における大学・学科選択満足度は、「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちを答えてください」という質問項目に対して、「満足していない」から「満足している」ま

での5段階で測定された。

第2回調査においては、次の3つの質問項目群も同時に調査された。第1に、悩みの内容である。「学業一般に関して」「単位や成績について」など14項目について、「いいえ（0点）」「はい（1点）」の2段階で回答が求められた。第2に、悩みの相談相手である。「教員」「父親」など8つの相談対象について「いいえ（0点）」「はい（1点）」の2段階で回答が求められた。第3に、大学生生活充実度である。学生相談や臨床心理学を専門とする教員の協議を経て、「やりがいのあることを持っている」「自分は人の役にたつことができる」など、8つの質問項目を新たに作成した。「全く当てはまらない（0点）」から「とてもあてはまる（3点）」までの4段階で回答が求められた。

2.3 調査対象者

2009年度の新入生のうち、第1回調査に参加したのは2459名であった。また、第2回調査に参加した学生の総数は、2年生から4年生までの4459名であった。

これらのうち、2009年度新入生であり、かつ2010年4月の第2回調査に参加した学生は、1608名（第1回調査の65.39%）であった。

分析対象となった1608名の学部と性別ごとの人数およびその比率を表1に示す。男性1141名、女性466名が分析対象となった。なお、経営情報学部において1名、性別が不明の学生がいた。

3 結果と考察

3.1 満足度の特徴

分析対象となった1608名の、入学直後の学部・学科選択満足度の平均は4.01（SD 0.93）であり、1年後にあたる第2回調査における平均は3.41（SD 1.09）であった。完全に同一の調査方法ではないものの、ともに1点から5点までの幅で測定されていることを考えると、1年の間に平均値が「どちらかといえば満足

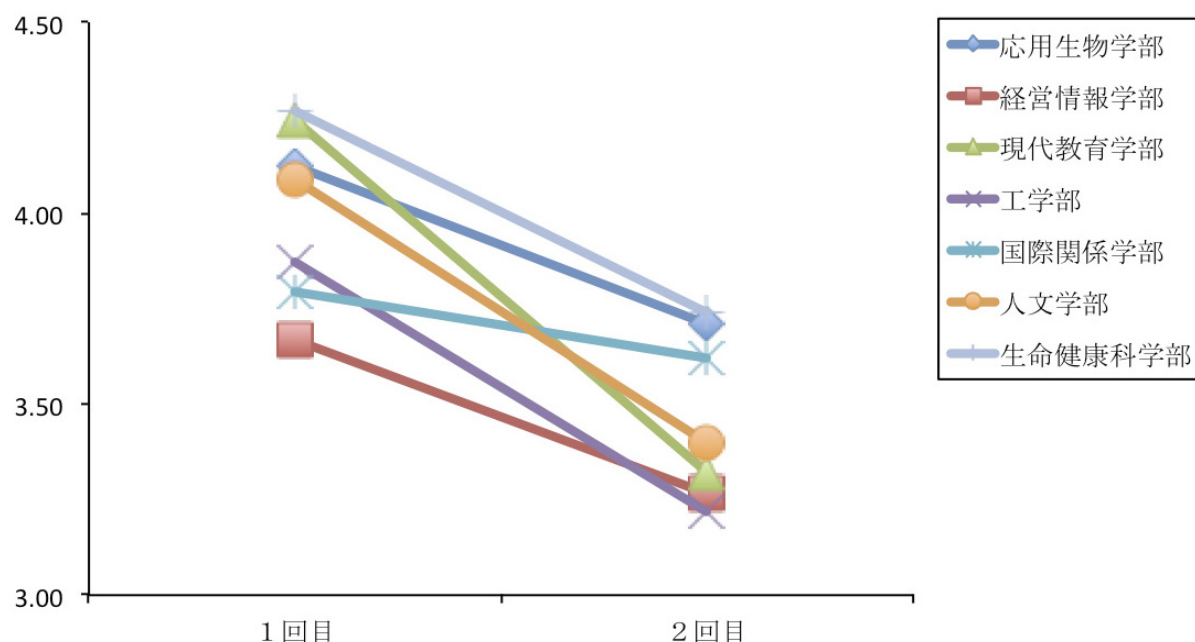


図1 学部別の満足度の変化

している」付近から、「どちらともいえない」と「どちらかといえば満足している」との中間付近まで、低下したことを意味する。

また、第1回調査における満足度と、第2回調査における満足度との間の相関係数は、 $r=.36$ ($p<.001$) という値であった。これは有意な相関係数ではあるものの、高い値であるとは言えないものであった。このことは、学部・学科選択の満足度が1年間に比較的変動する傾向にあることを示唆する。

3.2 学部別の満足度の変化

学部別に、第1回調査と第2回調査における満足度の平均値を描いたものが図1である。学部（7水準；被験者間要因）×調査時期（2水準；被験者内要因）の混合計画の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F(6, 1601)=5.20, p<.001$)。

現代教育学部（0.92低下）、人文学部（0.69低下）、工学部（0.65低下）については、1年間に比較的大きく満足度が低下していた。それに対して、国際関係学部については、第1回調査と第2回調査において大きな低下は見られなかった（0.17低下）。

これまでに、小塩ら（2008b、2010）では、学部や学科別の満足度を検討してきた。本研究で明らかにされたことは、学部によって入学直後の満足度からの変化の程度が異なるということである。入学後の満足度の変化に対しては、各学部のカリキュラム等の内容が大きく反映すると予想される。入学後の変化の様相については、さらに継続してデータを収集していく必要があるだろう。

3.3 悩み内容と満足度の関連

第1回、第2回調査における満足度と、第2回調査で得られた悩み内容との関連を表2に示す。

表2 悩み内容と満足度の関連

満足度 第1回	悩み内容	満足度 第2回	M	SD
-.22 ***	3. 所属学部・学科	-.44 ***	.21	.41
-.22 ***	13. 本学への入学	-.41 ***	.17	.38
-.09 **	14. なんとなく ノイローゼ気味	-.18 ***	.09	.29
-.12 ***	1. 学業一般	-.18 ***	.47	.50
-.16 ***	10. 生き方について	-.17 ***	.31	.46
-.14 ***	11. 就職について	-.16 ***	.55	.50
-.08 **	2. 単位や成績	-.14 ***	.46	.50
-.11 ***	12. 将来について	-.13 ***	.61	.49
-.07 **	4. 友人関係	-.11 ***	.13	.34
-.04	7. 恋愛問題	-.10 ***	.24	.43
-.10 ***	5. 自分の性格	-.07 **	.31	.46
-.07 *	9. 家族との関係	-.06 *	.10	.30
-.06 *	8. 経済的問題	-.06 *	.38	.49
-.04	6. 身体的健康	-.04	.20	.40

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

n=1568

悩み内容は第2回調査の結果によって並べ変えた

第1に重要な点は、入学直後の満足度が、1年後の悩み内容に関連しているという点である。「3. 所属学部・学科」「13. 本学への入学」については、いわば不本意入学に関連する悩みを表している。入学時の進学に関する悩みを1年後も持ち越し、そのことが満足度の低下に寄与している可能性が示唆される。また、

第1回の満足度よりも第2回の満足度のほうが、「3. 所属学部・学科」「13. 本学への入学」との間により高い負の相関を示した。このことは、入学時の不満が1年後の大学・学部・学科への所属に関する悩みを増大させ、さらにそのことが不満を高めていくという影響関係の存在を示唆する。入学後1年間で、学生が思い描いていた大学生活と現実とのズレをより認識するようになり、その認識がさらに不満へとつながっているのではないだろうか。

第2に、「10. 生き方について」「11. 就職について」「12. 将来について」など将来に対する不安は、第1回調査と第2回調査の満足度において、ほぼ同程度の相関を示していた。これらは比較的、長期的な時間軸をもった悩みであると考えられる。したがって、入学直後の悩みの状態を、1年後も引き継いでいる可能性があると考えられる。

第3に、「4. 友人関係」「7. 恋人関係」など同世代の対人関係については、入学時よりも入学後の満足度に関連するようである。

第4に、「14. なんとなくノイローゼ気味」については、第1回調査よりも第2回調査の満足度に比較的大きな関連を示していた。この悩みは、対象が定まらない漠然とした悩みや不安を意味する。入学直後の満足度とはあまり関連していない点を見ると、入学後の漠然とした不安が満足度を押し下げることにかかわっているのではないと思われる。

3.4 悩みの相談相手と満足度の関連

悩みの相談相手と満足度との関連を、表3に示す。悩みを抱いたときに、最も満足度の高さに関連する相談相手は「4. 母親」であり、次に「1. 教員」であった。また、第1回調査、第2回調査双方の満足度との関連を考慮に入れると、母親、父親、教員、先輩を相談相手に選ぶ学生は、比較的長期にわたって満足度が高い傾向にあった。

ただし、これら結果は、これらの相談相手をもつことが満足度を高めるという因果関係を表しているとは限らない。学生の対人関係のパターンと満足度のもち方との間の安定した関連である可能性も考えられるのである。すなわち、もともと父母や教員、先輩といった相手に相談しやすい学生は、大学生活においても満足感を抱きやすいという可能性があるといえる。

また、「2. 事務職員」「8. 学生相談室」を相談相手とすることと、満足度との間には関連がみられなかった。しかしながら、これらの項目の平均は非常に低い値であり（事務職員で $M=.02$ 、学生相談室で $M=.03$ ）、ほとんどの学生は、事務職員や学生相談室を自らの悩みの相談相手として選択していないと言える。

事務職員を相談相手とする場合には、教務や学生生活など、比較的深刻な悩みではない場合が多いと考えられる。その一方で、学生相談室を悩みの相談相手とする場合には、比較的深刻な悩みである場合が多いだろう。すなわち、これらの悩みの相談相手は、それ以外の相手と比べ、特定の悩みに特化した存在であるために、全体的な満足度とは関連がみられなかったのではないかと考えられる。

表3 悩みの相談相手と満足度の関連

満足度 第1回	相談相手	満足度 第2回	<i>M</i>	<i>SD</i>
.12 ***	4. 母親	.19 ***	.53	.50
.09 ***	1. 教員	.13 ***	.09	.28
.04	5. 兄弟・姉妹	.11 ***	.28	.45
.08 **	3. 父親	.10 ***	.29	.46
.04	6. 友人	.07 **	.80	.40
.09 ***	7. 先輩	.06 *	.27	.45
.01	2. 事務職員	.03	.02	.13
.01	8. 学生相談室	-.01	.03	.17

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

$n=1533$

第2回調査の結果によって並べ変えた

3.5 充実した大学生活と満足度の関連

大学生活の充実度を測定する項目と満足度との関連を、表4に示す。すべての項目について、第1回調査および第2回調査の満足度との間に有意な正の相関がみられた。

特に、比較的高い相関がみられたのは、「6. 大学生活が充実している」「3. 学内の生活環境に満足している」であった。これらは、満足度の概念に近い、大学生活の全体的な充実度や環境全体に対する満足の程度を測定する項目であるため、この結果は予想の範囲内であると言えるだろう。

その一方で、「1. やりがいのあることを持っている」「8. 大学の外に自分の居場所がある」などの項目については、満足度との間にあまり大きな関連がみられなかった。ただし、いずれの項目についても、入学直後と1年後ともに有意な関連を示していることから、これらの項目で表現されるような大学生活における積極的な姿勢は、長期的な満足度にかかわることが予想される。

4 最後に

本研究では、入学直後と約1年後の2時点における、大学・学科選択満足度に注目し、その変化と関連要因の検討を行った。得られた結果から、次のようなこと

表4 充実した大学生活と満足度の関連

満足度 第1回	大学生活充実度	満足度 第2回	M	SD
.32 *	6. 大学生活が充実している	.50 *	1.74	0.80
.25 *	3. 学内の生活環境に満足している	.47 *	1.67	0.76
.22 *	5. 楽しみにしている授業がある	.34 *	1.62	0.92
.23 *	7. 大学の中に自分の居場所がある	.33 *	2.05	0.75
.15 *	2. 自分は人の役にたつことができる	.24 *	1.48	0.76
.18 *	4. 色々と話せる友達がいる	.24 *	2.23	0.74
.18 *	1. やりがいのあることを持っている	.24 *	1.80	0.87
.16 *	8. 大学の外に自分の居場所がある	.19 *	2.18	0.73

* $p < .001$

n=1574

第2回調査の結果によって並べ変えた

が言える。

田川（2011）は、大学にとって学生の満足度を高めることの理由を2点挙げている。第1に、受験生の獲得である。在学生の満足度の高さは、受験生に対するアピールにつながるといえよう。第2に、在学生の諸問題の根底に満足度があると想定できる点である。学生の満足度を高めることにより、退学者の減少や、大学全体の活力の向上に結びつくことが予想される。

しかしながら、本学においては一部の学部を除き、入学から1年後にかけて全体的な満足度は低下する傾向にあった。もしも、学生の満足度が学生の諸問題にかかわるのであれば、いかにして満足度を高めるかという点に焦点を当てる必要があるとなる。

本研究の結果から示唆されることはいくつかあると考えられる。

第1に、不本意入学に対するケアをしっかりと行うことである。不本意入学は、比較的長期間にわたり、満足度を低下させるようである。受験制度上、不本意入学を避けることは困難であるが、何らかの形で対処することが必要となるであろう。

第2に、教員のみならず先輩が、悩みの相談相手となるような場を提供することが考えられる。大きな関連がみられたわけではないものの、先輩への悩みの相談は満足度の高さに関連がみられた。教員の職務負担の多さを考えると、学生同士が話しあうことのできる適切な場を設けることも、有効な手段であるように思われる。

第3に、充実した学生生活を送るような環境の整備である。大学の中に居場所があることや、楽しみにし

ている授業があることなど、学生生活を充実させることは、満足度の高さに結びついていると言える。

当然ながら、これらの施策を行う際にも、効果の裏づけが必要となる。今後も地道な検討を重ねる中で、学生にとってよりよい環境を提供することを考えることが必要となるであろう。

文献

- 見館好隆・永井正洋・北澤 武・上野 淳（2008）.
大学生の学習意欲、大学生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, 32, 189-196.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2006）. 2006年度入学生における進学目標・学科選択理由・満足度の学部間比較 中部大学教育研究, 6, 87-92.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2008a）. 中部大学人文学部の新入生における学科選択理由と学科選択満足度 中部大学人文学部研究論集, 19, 53-66.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子（2008b）. 中部大学新入生の学科選択満足度の分析—入学年度、学部、学科による比較と影響要因の検討— 中部大学教育研究, 8, 7-13.
- 小塩真司・桐山雅子・願興寺礼子（2006）. 大学新入生における悩みの有無および悩み内容の入学年度による変化 学生相談研究, 27, 138-148.
- 小塩真司・吉住隆弘・佐藤枝里・願興寺礼子・桐山雅子（2010）. 学科選択満足度に関連する要因—1998年度から2010年度までの新入生の分析— 中部大学教育研究, 10, 47-53.
- 鈴木由美・藤生秀行（1999）. 女子大生の友人数と自己効力について—大学満足度と過去の友人関係を中心として— 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 744.
- 田川隆博（2011）. 学生満足度の分析-名古屋文理大学満足度調査より- 名古屋文理大学紀要, 81-86.
- 山田剛史（2009）. 大学生の生活経験と適応意識 大学生の学習・生活実態調査報告書 研究所報（Bennese教育研究開発センター）, 51, 58-63.

准教授	人文学部	心理学科	小塩 真司
講 師	学生相談室		佐藤 枝里
教 授	人文学部	心理学科	願興寺礼子
教 授	学生相談室		桐山 雅子